

平成29年に特に注意を要する病害虫

中央農業試験場 病虫部 予察診断グループ

1. はじめに

北海道病害虫防除所、道総研各農業試験場、および道農政部技術普及課等で実施した病害虫発生予察事業ならびに種々の試験研究の結果から平成29年に特に注意すべき病害虫について報告する。

2. 平成28年の病害虫の発生状況

平成28年は、夏季が多雨となったことから軟腐病など腐敗症状となる病害が多発した。また、秋まき小麦のなまぐさ黒穂病が道内の広域にわたって発生し大きな問題となった。一方、てんさいの西部萎黄病、たまねぎのネギハモグリバエの発生量は前年に比べ少なくなった。

主要病害虫のうち多発となったものは、秋まき小麦の赤かび病、ばれいしょの軟腐病、てんさいの根腐病（黒根病を含む）、たまねぎの軟腐病、だいこんの軟腐病、りんごの黒星病、腐らん病、やや多発となったものは、水稻の紋枯病、ヒメトビウンカ、イネミギワバエ、バレイショの塊茎腐敗、黒あし病、たまねぎのネギアザミウマ、りんごの斑点落葉病であった（表1）。

表1 平成28年にやや多発した主要病害虫

作物名	病害虫名
水 稻	紋枯病・ヒメトビウンカ・イネミギワバエ
秋まき小麦	<u>赤かび病</u>
ばれいしょ	塊茎腐敗・ <u>軟腐病</u> ・黒あし病
てんさい	<u>根腐病</u> （黒根病含む）
たまねぎ	<u>軟腐病</u> ・ネギアザミウマ
だいこん	<u>軟腐病</u>
りんご	<u>黒星病</u> ・斑点落葉病・ <u>腐らん病</u>

下線は多発生となった病害虫を示す

3. 平成29年に特に注意を要する病害虫

1) あぶらな科野菜のコナガ

あぶらな科野菜の重要害虫であるコナガは、平成26年以降に道内で採取された個体から、ジアミド系薬剤の抵抗性遺伝子保持個体（以下、抵抗性個体）が確認されており、生産現場からも、ジアミド系薬剤によるコナガの防除効果が当初よりも低下しているとの指摘がある。コナガは、道内では露地での越冬ができないため、春に飛来してくる個体群に抵抗性個体が含まれていると推察されている。しかし、近年、冬期間もあぶらな科野菜を栽培している施設などで、抵抗性個体が越冬している懸念が示されたことから、越冬が疑われる地域において春季の抵抗性個体割合を調査した。その結果、平成26年からの3カ年調査してきた道内他地点における春季の抵抗性個体割合とほぼ同程度の低い割合であった。このことから、道内では春季の飛来個体群に含まれる抵抗性個体が当年の発生源であると考えられた。しかし、農耕期間中にジアミド系薬剤を多用した地点では、夏季の調査において抵抗性個体割合が高まっており、本剤の効果の低下を招くことが示された。以上のことから、コナガの防除にあたってジアミド系薬剤を使用する場合、以下の点に留意する必要がある。

- ① 連用は避ける。
- ② 防除後効果の確認に努め、効果が低い場合は、すみやかに他系統薬剤による追加防除を実施する。
- ③ 灌注剤、茎葉散布剤は、所定の希釈倍数、処理量を遵守する。

2) りんごの黒星病

黒星病は、りんごの葉および果実に病斑を形成して品質を低下させ、著しい収量減の要因となる重要病害で、防除は不可欠である。本病は、平均気温15～20℃で多雨となったときに多発するとされており、平成28